

動き出した2つの輪

「科学者コミュニケーション」の未来図



Oto1 の活動の柱には「2つの輪」があります。科学者同士の輪、科学と社会の輪です。科学者が行うコミュニケーション活動とは？なぜ私たちは活動するのか？Oto1 の活動の現場を紹介しつつ、来場の皆様と考えていきます。

日時：11月22日(土) 13:00-14:10
会場：日本科学未来館 7F 会議室1



東京大学大学院理学系研究科有志 科学コミュニケーショングループ

Oto1

く同様の活動を行うべき、と、私たち自身も言い切ることができませんでした。

意義があると思うから、意味があると思うから、私たちはここにいます。しかし、私たちは、実際は何を求められているのか？そして本当に実り多い活動のためには、何をすべきなのか？自分たちで動かし始めた2つの輪を、自分たちだけではなく、多くの人々の声を聴き、繋がり、ともに回していきたいとの願いを込めて、本ワークショップを企画いたしました。

そしてここから更にこの輪を広げ、自分たちにとっても、次世代の子供たちにとっても、より良い科学者たちの未来図を描いていきたいと考えています。ご来場頂きまして、誠にありがとうございました。

2008年11月22日
小寺 千絵
ワークショップオーガナイザー、Oto1

私たち大学院生にできることはないのでしょうか？

「私たち大学院生にできることはないのでしょうか？」、これは、昨年度、私たちが初めて企画したワークショップで問いかけたものです。

Oto1 は、研究者を志す大学院生たちの集まりです。昨今の厳しい状況の中、研究者として職を得ることができる学生は限られているかもしれませんが、しかしながら、私たちがサイエンスに魅せられ、夢中になっているということは間違いありません。

そして、この魅力的な営みを後世へと残していきたい—これは単なる我が儘ではないと信じています。私には幼い2人の娘がいます。彼女たちがなんで？どうして？と日々問いかける言葉は、私たちが研究対象に向ける興味となんら変わりありません。自然や論理の美しさに感動し、その先を“知りたい”と思う気持ちは、人間の根源的な欲求であり、楽しみでもあるのではないのでしょうか。

私たち Oto1 は、科学者を目指す自分たちに何ができるのか、足元を見つめ、少しずつ、活

動を開始しました。活動には2つの軸を置いています。異なる分野の学生・研究者を繋ぐ横の輪と、研究者たちのコミュニティを越えて回る縦の輪です。この2つの輪を回し、広げていくことによって、より良いサイエンスの未来に貢献することができるのではないかと考えました。

本ワークショップの前半では、ランチセミナー・ポッドキャスト・出張授業の各プロジェクトリーダーたちから、Oto1 の具体的な活動を紹介させていただきます。活動に至る動機や、実行にあたって得られたもの、感じた事など、自分たちの足で一歩踏み出した姿です。

後半ではご来場の皆さま方を交えたディスカッションを行います。一歩踏み出した Oto1、しかしながら、大学院生がこうした活動を行うということは、実は自明のことではありません。アウトリーチをしている暇があったら、データの1つも出せるのではないかと？という、内外からの声。未熟な学生が無責任な発言をすることへの不安。諸手をあげて、大学院生はすべから

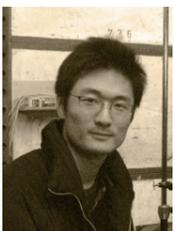


- ワークショップ
- ・活動紹介
小寺千絵/豊田丈典/池内桃子/音野瑛俊
- ・パネルディスカッション
生出秀行/平沢達矢/榎戸輝揚
- ポスター (東京国際交流館3階)
宮武広直
- リーフレット編集
宮武広直/平沢達矢



ランチセミナー・プロジェクトリーダー
豊田 丈典
(地球惑星科学専攻 M2)

普段はオフィスと実験室に引きこもっているが、思考は火星以遠へ飛んでいる。坊主と眼鏡がトレードマーク。趣味は掃除、惑星科学を楽しく過ごしやすい分野にしたいなあと、自分の立ち位置を模索中。



出張授業・プロジェクトリーダー
音野 瑛俊
(物理学専攻 D1)

まずは中性子寿命の精密測定。そして中性子研究を通じた超対称性粒子の探索を目指す。修士から粒子検出器が大好き。休日は競泳、水球、そして旅行。しゃべりながら物を考えるタイプ。



平沢 達矢
(地球惑星科学専攻 D2)

小学生の頃に恐竜に魅せられ、その初期衝動に駆られたまま、生命史の研究者を志す。現在は、獣脚類恐竜における呼吸器の進化というテーマに挑戦中。革ジャンとデニムをこよなく愛している。



ポスター制作
宮武 広直
(物理学専攻 M2)

素粒子と宇宙に魅せられ、「ダークエネルギー」を研究するダークサイドの住人と見せかけて実は癒し系、ときどきバンドマンになってギターを弾く、おいしいものと音楽が大好き。



Oto1 代表
小寺 千絵
(生物科学専攻 D1)

野山を駆け回ってヘビヤトカゲを捕まえて遊んだ子供時代を経て、現在は実験室にて酵母や大腸菌と格闘中。生きているってどういうこと？と問いを巡らしつつ、娘たちの生命力にも圧倒される日々。



ポッドキャスト・プロジェクトリーダー
池内 桃子
(生物科学専攻 M2)

山を歩いて植物を見ているうち、葉の形が無性に気になり始めて、植物発生学の研究に足を突っ込みました。隠居したら、どこかの島で植物を愛でつつ、のんびり暮らすのもいいなあと夢みがち。声がイイ人が好き。



生出 秀行
(物理学専攻 M2)

実験を通じた世界の探求に魅せられて、素粒子実験の分野に飛び込んだ。熟考派...というよりのんびり屋？な性格を買われ、ワークショップでは議論の進行役を務める。風光明媚な地を求め重たい写真機材を担ぐのが趣味。



榎戸 輝揚
(物理学専攻 D2)

異常に磁場の強い星(マグネター)のX線を天文衛星で研究。修士では雷雲が天然の加速器となる可能性を観測的に示した。プライベートで恋戦連敗？スキーと山歩き、黒霧島のお湯割りが好き。

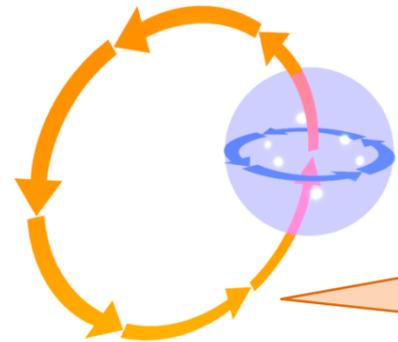


Oto1 スーパーバイザー
横山 広美
(広報・科学コミュニケーション 准教授)

Oto1 のサポーターをしています。やんちゃな彼らに手を焼くこともあります(?)、彼らの徹底的な議論、妥協を許さないコンテンツ制作、そこから生まれる結束感にいつも感銘を受けています。

「動き出した2つの輪：“科学者コミュニケーション”の未来図」

2つの輪とは？



「横の輪」 ～科学者間の交流～

私たちは、あらゆる分野の枠を越えて、学生や研究者同士のネットワーク・知識の共有の場を作り上げます。「横の輪」によって、広い視野を持って科学の現状と問題点についての議論を行います。

【実際の活動】 ランチセミナー、ポッドキャスト

「縦の輪」 ～科学と社会の交流～

私たちが行っている科学の楽しさ、驚くような自然の神秘やしくみを専門家以外の人々に伝えていきます。これにより、私たちの獲得した「知」を広く社会と共有し、「智」へと育てていきます。

【実際の活動】 出張授業

科学者コミュニケーションとは？

私たちは、**科学者自身が行うアウトリーチ活動**と**科学者の分野間交流**を合わせて「科学者コミュニケーション」と呼んでいます。

※2月13：00のワークショップでは、科学者コミュニケーションの未来図について、会場を交えて議論する予定です。
※具体的な活動の詳細はポスター展示（東京国際交流館3階）をご覧ください。

ランチセミナー

他分野の話を気軽に聞く。自分の話を気軽に話す。

Oto1では、異分野の大学院生らが交流する場として「ランチセミナー」を運営しています。

ランチセミナーの心得

- ・ランチセミナーでは、話者が自由に話題を設定できる。どんな話題でもよい。
- ・ランチセミナーでは、学年や専攻に縛られる事無く対等に議論する。
- ・ランチセミナーでは、気軽に楽しく議論する。



「なぜランチセミナーをするのか？」

大学院においてセミナーという制度は一般的なものです。セミナーの多くは研究発表会としての性格が強く、大学院生にとっては気軽に発言しづらいことがあります。また、専門知識を深めていく過程で「少しは他分野の事も知りたいな」という思いをもつ大学院生も少なくないでしょう。現行の制度を批判するわけではなく、追加要素として「異分野にいる人間が集って、学問を気軽に議論する」という場所があれば、**研究現場にまた違った楽しさが増えるのではないかと考えました。**

「ランチセミナーの意外な効用」

異分野の人々と顔を見せたコミュニケーションをしていると、異分野の文化を知ることができます。やってみて初めてわかりましたが、研究分野によって文化が全く違うのです!! 他分野の文化を知ることによって、感情的で**安易な他分野批判**をしない懐の深さが養われます。Oto1のランチセミナーのような活動には、お互いの無理解による分野間の衝突を避ける効果があるかもしれません。



「実績」

Oto1ミーティング後のお昼の時間を利用して、現在までに17回のランチセミナーを実施しました。土日を使っている、もちろん参加は義務でも何でもありません。にもかかわらずこれだけランチセミナーが続いているという事が、ランチセミナーの存在意義を間接的に示しているのではないのでしょうか。

ポッドキャスト

自分たちの“横の輪”メディアで、知の交流の活性化を!

Oto1では、大学院生自身による音声媒体のインタビューを制作しています。

私たちのポッドキャストは、

- ・若手研究者のパワーと研究に対する情熱に、
- ・院生インタビュアーが鋭く切り込み、
- ・おもに科学者コミュニティに向けて発信します。



11月15日
ウェブページより
音声配信開始!!

クリックすると
ポッドキャストが!!
研究の裏話も...

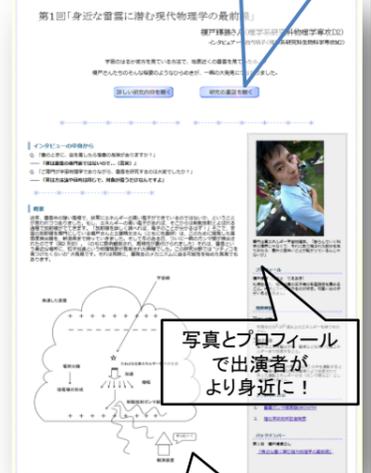
「なぜ横の輪メディアなのか？」

研究現場では、「専門知識の壁」「コミュニティの壁」が生じているのが現状です。Oto1で他分野の院生と語り合うなかで、「**人へ興味を持つことが、そんな壁を超える原動力になる**」と気づきました。目を外へ向けてみれば、「人」にフォーカスするという手法はジャーナリズムの一般的な方法論。むしろ、科学の世界の方が、純粋な科学の内容を重視するあまり、担い手である「人」を忘れがちだったのかもしれない。

いまの科学者コミュニティのなかで、積極的に“科学者コミュニケーション”に携わる人は、全体から見ればごく一部です。「人」を伝える横の輪メディアを使って、**分野間の知の交流を広げていきたい**。そう考えて、この企画をスタートしました。

「実績」

今春からスタートした本企画では、これまで数学・生物学・物理学といったさまざまな分野の研究者、計4名に出演して頂きました（そのうち第1弾を11月15日からウェブページで音声配信開始：右図）。リスナーからは、「他の分野の研究者が何をおもしろいと思って研究しているのかを初めて知った。」という感想をもらい、他分野研究者を**身近に感じる手軽な機会**を提供し得る、という手応えを得ました。このように、身近な横の輪メディアは、**知の交流を活性化**する可能性を秘めていると考えています。



写真とプロフィール
で出演者が
より身近に!

視覚的に情報を補う
ことで理解を助ける。

http://sc.adm.s.u-tokyo.ac.jp/Oto1/podcast/index.html

出張授業

最先端の研究現場を、大学院生の熱意とともに、全国の高校生に伝えたい!

Oto1では、大学院生による高校生への出張授業を行っています。

活動理念

- ・出張授業は、大学に蓄積されている知識を社会に還元する。
- ・出張授業は、高校生にとって進路選択の一助となる。
- ・出張授業は、大学院生にとって専門知を伝える修行の一環となる。



「組織的な活動 ～少ないエフォートで質の高い授業を～」

大学院生は、普段の研究生活に追われて大変忙しい日常を送っています。また、初めての出張授業には不安もあることでしょう。私たちはこれらの状況を踏まえ、なるべく**大学院生の負担を減らしながら、良質な授業を高校生に提供できるようなしくみ**を構築しようとしています。具体的には、アンケートの実施、報告書の作成などを通じて、ノウハウを蓄積するとともに、経験者を交えた練習会を行い、**常に授業の質の向上を目指しています。**

「実績」

現在までに都内の高校を中心に、5校で計14回、のべ300人程度の高校生に出張授業を行いました。アンケートの結果によると、90%の生徒が「大学院生の研究内容に興味を持った。」と答えています。右のような感想も頂いており、手ごたえを感じています。

高校生の感想

「今まで知らなかった学問に触れることができ、新しい世界を知った。」
「進路について考えるきっかけとなった。」

高校の先生の感想

「年齢が近いので、生徒が身近に感じる。」
「若手研究者の広がりゆくエネルギーに魅力を感じた。」

「今後の展開」

「地方高校でも東大がぐっと身近に!～大学院生 母校出張セミナー～」という企画名で平成20年度東京大学学生企画コンテストに応募し、優秀賞を獲得しました。今後は、**東京大学の公認・資金援助のもとに、講師となる東京大学大学院生を募集し、全国に広がる彼らの母校に訪問**していきます。この結果、出張授業が文化として全国へ広がることを期待しています。

